

六ヶ所原燃 PR センターから、太平洋沿いの道を八戸に向かい、新幹線で帰宅します。六ヶ所村の付近は湖沼地帯のようで、美しい景色を楽しめました。こんなに綺麗な清々しい場所に、放射性物質が大量に貯蔵され、限りなく放射性物質が生産されようとしています。不安と恐ろしさで一杯です。人の住めない場所になる可能性もあるでしょう。青森が核のゴミ捨て場になっているのも、屈辱に感じます。

二人は「帰心矢の如し」の気分になりましたが、「三沢空港」の看板を見ると「声だけでも聞いて帰りましょうか」と三沢に住む同級生に電話をしました。声が漏れ聞こえ、今、走っているところが彼女の家の近らしいと感じ、すぐに車を寄せて、確かめ、急遽、彼女と三沢空港で会うことに。本当に久しぶりです。私たちは少女時代に「赤毛のアン」の愛読者でした。時が流れ、二人とも白髪のアンになりましたが、手を取り合って再会を喜びました。



弘前では、小倉百人一首の十首を歌曲に作曲された笹森建栄先生が CD「今ひとたびの」をお土産に下さいました。愛がほとばしり出るような情熱的なソプラノ曲を笹森先生は作っておられます。キリシタンのお話の後に頂きました。CD ジャケットを眺めながら、暗記物が苦手な私も、この中に知っている歌がありますと言って、あひみでのちの心にくらぶれば昔はものをおもわざりけりと、つい口ずさみました。その時、ご一緒していたのは、高校1年の時の国語の先生でしたが、先生は「あひみでのとは？」と私に質問されました。「愛する人に出会ったでしょうか」と答えると、「いいえ、契り、情を交わしたです」「エッ？」晩熟の私は高校1年生の時には想像すらできませんでした。先生はその頃に、そんな解説してくださったのでしょうか。

さて、美女ならば花の色はうつりにけりないたづらにわが身よにふるながめせしまにと嘆くようですが、白髪のアンとなった私は、知らないことばかりなので、常に貪欲にあらざらむこの世のほかの思ひ出に今ひとたびの逢うこともがなと願ってしまいます。

もう一つのお土産は母校の創立130周年記念に頂いた、「本多庸一伝」です。本多庸一(1848-1912)は幕末から明治にかけての日本の偉人です。獅子奮迅の活躍をし、社会、政治にも関わりましたが、キリスト者として、伝道者、教育者の道を選び、わが身を顧みず精力的に働き、一生を捧げたのです。伝記に記されている彼の人格の基盤をなしているのは、武士の魂です。



「本多庸一伝」の挿絵より

身命を捧げても苦しくないという「天下国家」への視点、そのための絶えざる鍛錬、素養の積み重ねがありました。本多庸一は大事に当たっても泰然自若とした豪胆、ユーモアを見せると同時に、勇敢に物事に切り込んでいく、知性、力強さを持っています。

庸一も時代の制約を受けたと実感します。それは日本が天皇を頂点とする絶対主義的な富国強兵の軍国主義国家になった時です。日清、日露戦争を聖戦であり、自衛のためと信じ、協力しました。けれども日本の権力が、国民は天皇の臣民であるとする、身分差別構造を「国体」と称する論理は根本的にキリスト教とは相いれないのです。いかに、教育勅語の道徳的徳目は武士道に合致している部分があるとはいえ、根本が違います。

天皇制国家とキリスト教との衝突が起こり、キリスト教界は排斥され、権力で圧倒されました。本多庸一は苦渋の中で生き残りの策を練り、時代の動きに従わざるを得ませんでした。その時も、今に至るまでも、信仰の自由と天皇制はキリスト教界の最も鋭く対峙すべき課題です。